第８回館長講座　『最古の土器の追究』

司会： 皆様，こんにちは。館長講座にお越しいただき，ありがとうございます。

定刻となりましたので，本日は，第８回館長講座『最古の土器の追究』と題しまして，鷹野館長にお話をいただきたいと思います。それでは，鷹野館長，よろしくお願いいたします。

館長：みなさん，こんにちは。今日は，久しぶりにお天気になった土曜日のような気がいたします。

前回は，主に縄紋時代の終末期をめぐってのお話でした。今回は，縄紋時代の最古の土器を追究することの研究史を振り返ってみようと思います。

古い段階の土器として追究されていたものに，諸磯式（もろいそしき）土器というのがございました。その諸磯式土器が，いったいどのくらいの古さなのか，あるいは新しさなのかということについては，いろいろ考え方に違いがあったということを前回紹介いたしました。

この諸磯式土器が古そうだということが分かってきたのが，いろんな方面からの所見が，総合的に見られてからのことでありました。

まず，大正末期から昭和の初期にかけて，鳥居龍蔵の言う厚手式，現在の中期くらいの土器ですが，その厚手式の土器よりも下のほうから，土器を作る粘土の中に，草を混ぜた，これは「胎土に繊維を含む」と表現しましたが，粘土の中に草を混ぜた土器が発見されてきました。

そして，諸磯式の中にも，同様に，土器を作る時の粘土に草が混ぜられたものがあるということも明らかになっていきます。そういうことで，諸磯式といっても単純ではなくて，土器の粘土の中に繊維が混入されているものと，そうでないものというのがあるんだろうと。繊維が混入されるかどうかということによって，後に，花積下層式とか，関山式，黒浜式といった型式に細かく分けられることになる蓮田式というグループと，それから，狭義の諸磯式，繊維が含まれていない諸磯式に分けられるだろうということになりました。

この段階においては，胎土に繊維が混入されている土器が取りあえず最古のものだろうと，つまり厚手式より古い段階にこれらが置かれるということが定まったわけです。

そして，その繊維が混入された土器には，諸磯式の中の範囲で考えられた蓮田式などの繊維を含んだ土器と，この蓮田式でない土器，諸磯式の範囲の外にあるものというのが，見られるようになってきます。蓮田式と呼ばれた広義の諸磯式の中の繊維を含む土器というのは，これは条痕（じょうこん）がなかったり，底が平底であったりというものが多かったのですが，諸磯式の外にある，諸磯式と認識されないような繊維を含んだ土器というのは，アカガイのような肋脈のある貝でつけられた条痕紋があって，そして平底のものや丸底のものがあります。これは後に茅山（かやま）式といわれるようになっていきます。この条痕を持つ繊維を含む土器というのは，条痕のないもの，つまり諸磯式の仲間のものよりも古いのではないかということが想定されていきます。

その後条痕のある土器，条痕紋土器よりも，さらに下層から縄紋もなくてまた繊維の混入もない土器が新たに発見されていきます。

ということになりますと層位的に，繊維が含まれていて条痕を持つ土器というのは，早くも最古の土

器という位置をおりてしまうことになりました。

この段階で，条痕紋土器が最古の段階でなくなった時点で，最古という位置を占めていた土器は，底部が円錐形又は丸底，あるいは，よく言われるのが乳房型という，もうちょっと丸っぽいスタイルを持っていて，形は非常に簡単な深鉢形をしています。それから，ここに挙げた 3 つの土器にはいずれも縄紋が付いていません。縄紋がないことはないのですが，縄紋は全くないか，ごくまれだというようなものです。

関東地方では，この段階の型式を三戸式と田戸下層式と名付けられています。これらには繊維が全く混入されていません。それから繊維が混入されているのですが分量的には少ないという田戸上層式・子母口式と名付けられた型式が認められていまして，この順番に古いほうから，三戸・田戸下層・田戸上層・子母口式と編年されていくことになります。

今，紹介しました繊維の混入が全くない三戸式・田戸下層式の土器ですが，こういう非常に単純な尖底土器です。このところの紋様は，線が沈線で，沈む線と書いて沈線といいますが，たくさん横にあります。それから，これも，ただ横に沈線があるだけ。これは，ちょっと見えにくいんですけれども，この辺に横の線があると同時に，この横の線の間は縦方向に，やっぱり線が引かれていますが縄紋がない。

繊維がわずかに混入されてはいるものとして，このような田戸上層式や子母口式が挙げられていまして，左側が田戸上層式，右側が子母口式の土器ですが，左側の写真の土器はこれは高さが 57 ㎝あります。相当大きいんです。繊維がどうのこうのとさっきから言っていますけれども，土器を作る時に粘土の中に繊維を，草を混ぜて作ります。目的は何かというと，こうして土器が大きくなると，どうしても重くなります。そこで土器の軽量化をはかるということも，この草を混ぜる，繊維を混ぜるということの一つの目的だったようです。

これは，割合，まだ底が尖っています。尖底だったり，丸底だったりという土器であります。この辺のところ，三戸式，田戸下層式とか，田戸上層式というところが，先程の繊維が入っている，入っていないという観点からすると，どうも，この段階では一番古そうだという認識がされています。

ちょっと遡りますけれども，縄紋時代の始まりというのは，一番古い土器，最古の土器を探していくということによって決められるんだということで，縄紋土器を，型式学的に，また層位学的に研究を進めて細かく分けて編年してきたのが，山内清男です。これは，前回も山内清男のことは，だいぶお話しいたしましたけれども，あらためて山内清男の縄紋時代の始まりに関する研究を見てみます。

山内は，年代の尺度でもある土器の型式，これを細かく分けていこう，土器型式を細かく分けることを徹底的に進めていくことによって，一番古い段階の土器というものを見極めよう，そして，その一番古い段階の土器の年代を決定することによって，縄紋時代の年代というのも考えていこうじゃないかという方向で研究を進めていきます。

また，細かくいくつかの文献をあたることになりますけれども，昭和 3 年に書かれた「下総上本郷貝塚」，これは前回も紹介しましたが，加曽利貝塚での調査の結果を踏まえて，この段階では，関東の土器型式というものを「(一)繊維を含む土器型式，(二)繊維を含まない諸磯式，(三)「勝坂」または「阿玉

台」，（四）加曽利E，（五）堀之内，（六）加曽利B，（七）安行という年代的序列」があるとまとめます。

この段階では少し研究のされた年代を遡ってしまいますが，もうすでに（一）の「繊維を含む土器型式」よりも古いものを，先程指摘してしまいましたけれども，この昭和 3 年の段階では，こういう認識だったわけです。

この段階では，最古の型式とした早期の茅山式，代表的なものにこんなものがあります。ここに挙げたものは，皆，平底ですけれども，丸い底のものもありますし，紋様というものがほとんどないのです。ただ，いずれにも共通しているのは，土器の表面を，貝殻条痕，先程言ったアカガイのような，肋脈のある貝で，表面を撫でる，擦ることで貝殻条痕紋を付ける，これは土器の外側だけじゃなくて内側にも付いています。

そして，この土器には，刺突紋というか，幾何学的な構成で点々で描いた紋様がありますし，それから，この段階も，この土器でも，やはり並行した線が何本か引かれているといった程度の紋様があります。共通する特徴として，紋様がほとんどない，その代わり貝殻条痕が，ほとんど全体を覆うというものであります。

次に山内は 1929 年，昭和 4 年から 5 年にかけて「関東北に於ける繊維土器」という論文を『史前学雑誌』に書いていまして，この論文の中で，青森県の八戸の是川中居貝塚，それからオセドウ貝塚，これは五所川原市，旧市浦村ですが，この貝塚の円筒下層式と名付けられた土器に繊維が入っているとして先程の茅山式の段階と同様に最古の土器の特徴であるということを指摘します。

さらに，宮城県の大木囲（だいぎがこい）貝塚，これは七ヶ浜町です。その他，函館の住吉町遺跡などの発掘調査を通じまして，関東や東北の繊維土器，繊維が含まれている土器を追いかけていきます。そして，各地の繊維土器を明らかにしていって，さらにそれ以前の土器の検討を行っていきます。各地の遺跡での出土状況と層位的な関係，遺跡の中で上から出たか下から出たかというような相対的な関係などから，古い段階の条痕を伴う型式と新しい段階の条痕を伴わない型式を区別していきます。

この古い段階の条痕のある型式というのは，現在でいうと早期後半の土器で，新しい段階の土器は，前期前半の土器というところです。

そして，さらに条痕のある繊維土器以前の段階として，先程，三戸・田戸下層を挙げたような繊維を含まない尖底の一群の土器を位置付けていきます。

こういう研究過程の論文がいくつか発表された後，総まとめ的なものとして書かれたのが，昭和 7 年から 8 年の「日本遠古の文化」という論文です。雑誌の『ドルメン』に連載されたものですけれども，それまで進められてきた土器型式の細別，細かく分けるということを基礎として，先史時代の年代的な秩序づけを行った論文です。

この「日本遠古の文化」自体は，4 章に分かれているもので，第 1 章が「縄紋土器文化の真相」と題する所で，これは縄紋文化の系統的な理解というのは，文化要素をただ並べていくというだけではなくて，土器型式の細別というものを基礎にして，縄紋土器のそれぞれの地域における様相だとか，それぞれの地域ごとに見られる年代的な編成で，地域ごとに，どの型式が新しいかということを編成して行こう，つまり編年ということを基礎として，縄紋土器の研究が進められていくのだと言っています。

第2章が「縄紋土器の起源」。いま，ここで扱っている問題に関することが書かれています。この論文が書かれた段階では，最古の土器というのは，先程紹介しました尖底の三戸式や田戸下層式であるとしたわけですが，さらに，これらが大陸の土器，シベリアや沿海州の方面との系統的な関係を持つだろうと，予測を述べます。

そして，三戸式や田戸下層式の縄紋が乏しい，形が非常に単純な形をしていることや縄紋というものが乏しいというようなことを示して，縄紋離れした点だという表現をして，さらに深く吟味しなければならないと注意を促しています。

そして，まだまだ，この三戸式や田戸下層式の段階では「縄紋の底が見えたとは云い切れない」と述べ，もっと古い段階の土器の存在の可能性を指摘しました。

そして，その次に書かれたのが「古式縄文土器研究最近の情勢」という論文です。この論文は主として，押型紋土器と総称されるものの研究です。押型紋というのは，レジュメに「押型紋と縄紋がどちらも原体を回転してできる」と書きましたけれども，押型紋土器というのは，丸い棒に彫刻を施して，これを転がして付ける紋様だと，つまり，縄紋は縄そのものを転がして紋様を付ける，押型紋は彫刻した棒を転がしている。つまり，紋様を施す原体を土器の表面に転がして紋様を作るというもので，基本的にはこれは同じ技法だと，縄紋土器の基本と同じだということで，縄紋土器の系統の中に入るということを当然のこととしてみるわけです。

押型紋の種類として，楕円・山形・格子目（こうしめ）と，レジュメに書きましたが，これが押型紋土器なんですが，右下の土器が楕円の紋様の付いた押型紋土器で，左側の土器は楕円と山形，このギザギザの付いている土器です。これらが押型紋土器です。

日本各地の押型紋土器が同一の手法で，楕円とか格子目とか，こういった共通の種類の紋様を持っているということから，押型紋土器というのが，一つの系統の中で，日本各地にいろいろあるけれども，それらは同じ系統に属しているということは，全国的に同一の年代に属していると述べます。

つまり，九州でも押型紋土器が出ます。それから，東北地方の南部でもよく押型紋土器が出ます。同じ押型紋土器ならば，九州の年代と東北の年代とは，同じ年代になるのだということをいうわけです。関東地方では，この押型紋土器は，三戸式や田戸下層式，つまり，この段階で縄紋の底が見えたとは言い切れないながらも，取りあえず最古の段階として置かれている三戸式や田戸下層式の段階に伴うということから，三戸式や田戸下層式が関西とか西日本にはないけれども，押型紋土器を通じて，同じ年代として考えることができるだろうといえます。この後，山内の研究が進まなかったわけじゃないのですけれども，戦後1960年に「縄紋土器のはじまる頃」という論文を書くまで，しばらく沈黙することになります。

そして，さらに古い土器の追究を見ていきます。三戸式や田戸下層式の粘土の中に繊維を含まない，縄紋があまり施されない，沈線紋や貝殻紋などで紋様が付けられる。そして尖底の土器，こういったものが，一時期，最古の土器の地位を占めていましたが，これらは数年間しか最古の土器としての地位は保てませんでした。

1941年白崎高保（たかやす）という方が「東京稲荷台先史遺蹟」という論文というか報告を『古代文化』12-8に発表します。白崎は，中学生の頃，昭和12年頃といいますが，東京の板橋区の稲荷台で関東ローム層の直

上かローム層に食い込んでいるような形で出土する土器を採集していました。その土器を発表したのが，この論文なんです。土器自体も，もちろん完全な形のものではなくて，土器の破片を幾つか報告したのですが，その破片も，これまで見つかっていなかったような，これまでのものとはちょっと違うものだったわけです。形式学的な観点からは，それらの位置が良く分からないものだったのですが，これらが採集された層位が注目されました。

関東ローム層の直上とか，ローム層に食い込んでいるという状況が，この土器が非常に古いんじゃないかと考えられたのです。この頃関東ローム層の中には人間の生活の跡はないと考えられていました。というのは，関東ローム層というのは火山灰の堆積した土で，かなり厚い火山灰です。その堆積の状況を見ると，年がら年中火山灰が降っていたような印象を受けます。そういう中で，人が生活できるわけがないだろうというのがこの当時の常識です。だから，関東ローム層の中には，人間の生活の跡はなかったんだろうと思われていたのに，ローム層に刺さるようにして土器が見付かっているということで，注目されたわけです。

この土器は，後に稲荷台式と名付けられまして，後に撚糸紋（よりいともん）土器と総称されます。この土器の形は，写真の左側です。砲弾型，大砲の弾のような形をしている尖底のとんがり底の深鉢形の土器です。さっきの三戸式よりももっと単純な形と言ってよいと思います。

今，撚糸紋と言いましたけれども，これは丸い棒に縄を巻き付けて転がすんです。だから，繰り返しになりますが，縄紋は縄という原体を転がします。押型紋は彫刻した棒を転がします。撚糸紋は縄を巻き付けた棒を転がします。紋様を付ける原体を土器の表面に転がすという点で，全部，手法としては，同じだと言えるんです。

さらに，それと同じようなものが，今度は，1942 年に，矢嶋清作という方が「東京市杉並区井草の石器時代遺蹟」という報告をします（『考古学』13-9）。これも稲荷台式と似たような形で，同じような砲弾型の尖底又は丸底の土器で，口縁部のところがめくれあがっている。口縁部にも，器面全体にも，縄紋が施されているという土器ですが，これを井草（いぐさ）式と名付けて報告をします。この井草式には，押型紋土器が一緒に出ませんで，というところからすると，これは子母口式などよりも以前のものだろうという指摘がされました。

でも，まだまだ，稲荷台式にしても，井草式にしても，それぞれの関係もまだ分かりませんし，また，それらが全体の中でどういう位置付けがされるのかについては，確証が得られないでいました。

そうこうする中で，第二次世界大戦が終わりまして，戦後の研究の中で，この撚糸紋土器と総称される土器の研究が主として明治大学の考古学研究室のメンバーによって集中的に行われていき，成果が挙がっていくことになります。

まず，1949 年に明治大学によって，横須賀市の平坂貝塚が調査されます。この平坂貝塚の貝層の中から，無紋，つまり紋様がほとんどない，あるいは，擦痕，擦ったような跡が付いているだけの土器が見つかりました。

さらに，貝層の下の混土貝層，少し土を混ぜた貝層の中から，撚糸紋土器が出て来ました。つまり，撚糸紋土器が古くて，その上から，無紋あるいは擦痕のある土器，後に平坂式と名付けられますけれども，この関係が分かりました。ともかく，撚糸紋土器の次の段階に無紋の土器があるんだという認識がされます。

これより先に，立正大学の吉田格が茨城県の花輪台貝塚を調査しまして，そこでの新発見の土器を報告しています。花輪台式と名付けた土器です。この花輪台式について報告をした吉田格は，稲荷台式との関係を稲荷台式が古くて花輪台式がその次，さらに井草式が次の段階に来るという順番を考えました。

1950年，昭和25年に明治大学が横須賀市の夏島貝塚の調査をいたします。夏島貝塚がある場所は，横須賀の港の中なんです。横須賀は軍港でしたので一般の人が立ち入ることができなかったのが，戦争が終わって，一般人も立ち入ることができるようになったということで調査ができたわけなんです。

この夏島貝塚で，上下5層にわたる古い段階の層位状況が明らかにされます。一番下の層に，撚糸紋土器である夏島式の土器が出土しました。これは撚糸紋土器ですので，稲荷台式と同様に，土器の表面を撚糸紋が覆っている土器でした。

これは，写真の右側です，夏島式です。先程の稲荷台式と比べますと，土器の表面の撚糸紋の間隔が夏島式は密でして，稲荷台式は非常にまばらなところがあります。

そして，さらに夏島貝塚の夏島式を出す層の上の層から，田戸下層式・田戸上層式・子母口式・茅山式を出土する貝層土層が明らかになりまして，撚糸紋土器の位置というのが，明らかに，田戸下層式・三戸式などよりも，下に来る，古いんだということが，層位的に，ここで確認されたわけです。

夏島貝塚の調査は，縄紋時代研究の上にもう一つ大きな影響を及ぼすこととなります。

夏島式土器を出土する貝層から得られましたカキの貝殻と木炭，これらをミシガン大学のグリフィン教授のもとに送りまして，当時，このころから盛んになり始めた放射性炭素による年代測定をしたわけです。1957年にミシガン大学に送りまして，この結果が，2年後，1959年になって届きます。その結果が，カキについては9450年±400B.P.という数値が，木炭については9240±500B.P.という数値が報告されました。

レジュメに「ビックリ！！」と書きましたが，B.P.というのは，Before Present（ビフォア プレゼント），現代以前という意味で，具体的には1950年から，を意味します。紀元後1950年から9450年±400年前という数値です。単純に言いますと，この±のところを外しますと，大体，カキについては紀元前7500，木炭については紀元前7290という数字です。

何がびっくりかと言いますと，当時，世界で最も古い，世界で最古のものだと考えられていたメソポタミアの土器が，紀元前4500年くらいと考えられていた，そういう時代です。

夏島の土器は，土器というか，土器を出土する層のカキと木炭の示す数値，つまり，これは夏島式の土器の年代を示す数値といってよいと思うんですが，これが非常に古い。メソポタミアを上回るどころか，それよりも古いんです。

では，夏島式がこの段階で最古かというと，日本列島にはもっと古いものがあるんだと。日本列島の土器は，一足跳びに，数字の上では世界最古の土器であるということになったわけです。

この測定を依頼した明治大学の杉原荘介も，予期していたよりもはるかに古い数字だということで，何かの間違いではないかという疑いも持ったというくらいでした。

しかし，この数字を基にして，明治大学に居りました芹沢長介，後の東北大学の考古学研究室の先生です。芹沢さんの「日本最古の文化と縄文土器の起源」という論文が著されまして，芹沢さん曰く「縄文土器は今のところ世界最古の土器だという結論が生れてくる」と述べるに至りました。

この後，放射性炭素による年代に依拠した立場を取る芹沢長介さん達山内清男の間で見解の相違が顕

在化していきます。沖積世，更新世が大体，今から 1 万年くらい前から始まったというふうに考えていた地質学者達の年代観と上手く合うというところもあって，そういう地質学者達と芹沢長介さんらと，それから縄紋土器そのものの研究とか，それから大陸や周辺との遺物の比較などによって，縄紋土器の年代を考えていこうという研究方法を取っていた山内清男と佐藤達夫先生らの間に，縄紋時代の始まりの年代に関するC14論争といわれる，感情的にもなったともみえるやり取りが行われることになります。

その一方，1955 年，昭和 30 年頃から，各地で洞窟遺跡の調査が行われるようになっていきます。これは，関東にしか見られなかった撚糸紋土器とか，あるいは，それよりもっと古い土器があるのではないかということで，それらを探すためでもある調査が進められていきます。

洞窟というのは，もちろん深い洞窟もそうですけれども，そうでなくて，ちょっとした岩陰になったところなども含んでいますけれども，洞窟や岩陰は，生活の場となるところがあります。生活の場となったり人がいなくなったりする。いなくなる理由はいろいろあると思うんですが，例えば，洞窟の上のほうの岩が崩れてきてしまって，住めなくなってしまった。そして，人がいなくなる。でも人が住むには良い環境なので，また人がやって来る。また人がいなくなる。というようなことを繰り返していくと，人の生活の跡がだんだん堆積して溜まっていくんです。

というわけで，層位学的な研究には貝塚と並んで非常に好都合なところなのです。この洞窟遺跡の調査というのが昭和 30 年ごろから盛んに行われるようになってきます。

まず，昭和 30 年，山形県の日向（ひなた）洞窟が調査されます。この日向洞窟では，後に本ノ木（もとのき）式と呼ばれるような多縄紋土器，これは単純に縄を転がすだけではなく，細工した縄を使った紋様のある土器で，後でまた詳しく述べます。爪のようなものを押し付けて紋様にした爪形紋土器。それから，粘土の紐を貼り付ける隆線紋土器と呼ばれるようになる土器などが出て来ます。

しかし，これらが先程の撚糸紋土器と，どういう関係にあるのかというようなことについては，定められませんでした。

日向洞窟は山形県の高畠町（たかはたまち）にありまして，米沢盆地の東北のすみといいますか，宮城県の白石市から米沢盆地に抜ける国道 113 号線の出口にあたるところです。高畠町には日向洞窟の他に，一ノ沢洞窟，観音岩洞窟群とか，非常に多く洞窟遺跡群が存在していまして，遺跡として残っている洞窟が，これだけたくさん密集している地域というのは他にあまり例を見ません。

この写真ですが，日向洞窟の全体で，凝灰岩の露頭が長年の侵蝕（しんしょく）とか風化作用によって，洞窟が形成されていったようでして，日向には 4 つ洞窟があります。

この一番大きい洞窟が，日向第 1 洞窟で，人間の生活の跡が一番良く残っているところです。この写真は，次のスライドと同様ですが，先週，この博物館の相原さんが撮ってきてくれたものでして，早速，使わせてもらっています。

右下の写真，これは開口部，口を開けているところです。現在，ここは国の史跡に指定されています。

ちょうど今，東北芸術工科大学を中心とする調査団が日向洞窟周辺の発掘調査をしていまして，これも，前の写真と同様に相原さんが提供してくれたものですけれども，洞窟自体は，先程言いましたように国の史跡に指定されていますので，もう掘ることは原則できません。

そこで，今掘っているのは，洞窟から 150 メートルほど離れた所で，ここでは日向洞窟でこれまで発掘されていたのと同じような時期と内容の遺物が出ているということです。右下の写真では，石斧がいくつも並んでいることが分かります。

そして，洞窟ではありませんが，1956 年と 57 年に，新潟県の本ノ木遺跡が山内清男・芹沢長介によって調査されています。東北に来て，仙台のすぐ近くに来て，芹沢長介と呼び捨てにするのは非常に恐れ多いことなんですが，学史上のこととしてお許しください。

この本ノ木遺跡では，石槍が非常に多く出土しました。そして後に本ノ木式と名付けられる土器が出土します。こういう土器です。これも縄を使って紋様としているんですが，今まで見てきたような縄を土器の表面に転がして紋様とするのではなくて，縄を土器の表面に押し付ける，そして離してまた押し付ける，手間暇かかると思うんですが，縄を何度も押し付けて紋様としています。中には，ただ押し付けるだけではなくて，押し付けて，そのまま，ちょっと転がして，また押し付ける，半分置いて半分転がすというので，半置半転技法と言いますけれども，そういうようなものも見られます。これらは，縄を土器の表面に転がす，縄紋の技法の萌芽と見ることのできる土器です。

この土器が，縄紋時代以前のものだとされている石槍と一緒に出てくるのだとみる山内清男と，それから，そうではなくて，石槍は石槍，土器は土器，別だと考える芹沢長介の間に論争が起きまして，「本ノ木論争」というのに発展します。

それまで，芹沢長介は，山内清男の弟子だということを自認しておられたのですが，この本ノ木を大きなきっかけとして，対立するようになっていってしまう。それから，先程の放射性炭素の年代観という点でも，意見を別にするようになっていくわけです。

これが，本ノ木の石器で，左のほうに石槍型の石器があります。

それから，本ノ木遺跡の土器，押圧縄文土器です。まだ，これらと先程の撚糸紋土器との関係というのは分かりません。

そして，1958 年と 59 年に，新潟県の小瀬が沢洞窟の発掘調査が長岡の博物館におられました中村孝三郎さんという方によっておこなわれ，その報告書が出されています。

ここでも，本ノ木と同様に，多くの石槍が得られたほかに，上層から押型紋土器や撚糸紋土器が出土しまして，下層からは本ノ木式も出るんですけれども，それ以外に，今まで知られていなかったような紋様の土器が出土していましたが，層位的なものが，ちょっと混乱をしていまして，正確な上下関係は分かりませんでした。

ただ，下層から出てきた土器については小瀬が沢式と命名されまして，その小瀬が沢式の土器の紋様から篦紋とか，窩紋，刺突紋土器とも呼ばれるようになりまして，後に，この一群は，佐藤達夫先生によって，最古の縄紋土器としての指名を受けることになります。

小瀬が沢でも，先程の本ノ木と同じような石器が出ていますし，写真の右上のほうが断面三角形錐，これが典型的なものです。それから，植刃。両面加工の植刃。こちら側の面だけじゃなくて，裏側もちゃんと加工されている石器です。それとか，尖頭器。先の尖った道具とか，右下のものは，半月形石器

などと呼ばれています。

そして，また石斧も出て来ました。レジュメに局部磨製石斧と書きましたが，刃の部分の周辺だけ磨いているんです。局部，部分的に磨いた石斧なので，局部磨製石斧と呼ばれていますが，この局部磨製石斧をめぐっていろいろ議論がありました。

磨製石器というのは，今までの時代区分の中では新石器時代の産物であるとされ，旧石器時代にはこういう磨いた石器はないというのが，常識だったはずですが，日本列島においては，非常に古い段階で旧石器時代になるような遺跡から出土する遺物の中に部分的にではあるけれども，こういう局部磨製石斧が出土します。これは多分，日本列島という風土の特異性がもたらすものなのかなと思います。

それから，土器なのですが，上のほうに，隆線紋土器，後で完全な形のものをお見せしますけれども，粘土の紐を貼り付ける隆線紋土器。それから，下のほうの一群は，爪形紋土器で，爪で押したような跡が見えます。

それから，より下層からということなのですが，先程の本ノ木と似たような紋様のもので，この辺の一群がずっとそうです。押圧縄紋，縄を押し付けた紋様の土器。それから，これらは窩(か)紋。「窩」は，穴ということですけれども，窪みを付けているだけの紋様で，それから箆紋としたのは，すだれのような紋様というか，線がたくさん引かれている。こういう箆紋とか，窩紋とか，刺突紋とかいうようなものが出てきています。これらの位置が一体どうなんでしょうか。

小瀬が沢洞窟の発掘に続きまして，1960年から62年にかけて，小瀬が沢洞窟のすぐ近くの室谷(むろや)洞窟を，やはり中村孝三郎さんが調査しています。この室谷洞窟の調査で井草式土器そのものが出土しました。

さらに，井草式土器の下の層から，後に室谷下層式と呼ばれるようになる縄紋の施された土器が出土しています。

井草式というのは，この段階では，おそらく撚糸紋土器の中でも，一番古い段階になるだろうと考えられていました。その下層に，井草式よりも明らかに古いというものが見付かるわけです。

ここにおいて，井草式は最古の土器としての位置を失うことになります。これに付いての山内清男の言葉は「久しく孤高・独善・専横をきわめた関東の井草城を初めて開国に向かわせたもの」であるという表現をするくらい，ある意味での大発見だったわけです。

室谷下層式は，平縁，有段の帯状の口縁部を持ち，隅丸方形の平底で，縄を回転したり押圧したりした紋様で，回転縄紋，縄を転がして紋様を付けるというのが一般化する時期で，その縄を回転する，回転しないという点からすると，本ノ木式のほうが古いだろう，そして，室谷下層式はその次に来る段階だろうと考えられました。

完全な形に復元された土器が，いくつもありまして，縄紋土器の本にはよく出てくる写真ですけれども，有段・帯状の口縁部というのは，このように段が付いていて帯状になっている。この土器も段があります。それから，底部は明らかに底面が四角いんです。角底，隅丸方形の平底で，ここのところには縄を回転させて紋様にしています。しかも，転がす縄そのものにすでに細工があります。これは，いず

れ出てくる話ですけれども，縄紋というのは単純に縄を転がすだけじゃなくて，縄をいろいろ細工して，例えば 2 本の縄を撚り合わせたり，それから太い縄と細い縄を巻き付けてみたりとかいうようなこともするんですけれども，そんな技法がこの土器にすでにみられるんです。

それから，写真の左の土器には，丸い穴が開いておりますが，どうも，これは注ぎ口だろうと，こういうところから，液体というものを中に入れるんだということが想像されます。これも，室谷下層式の土器で，やはり有段の口縁部で一帯に縄紋が残されているものがみられます。

こうして，井草式の位置というのが決まり，さらに，それより古い土器があり，古い段階に縄紋がもう採用されている。その縄紋の採用され方からして，どうも本ノ木式というのが古くて，それ以外に，先程小瀬が沢に出て来ているような隆線紋とか，爪形紋とかいう土器があるんだなと，あるんだけど，その位置はよく分からないということが考えられていた段階で，1960 年から 64 年にかけて長崎県の福井岩陰遺跡が調査されます。

鎌木義昌，芹沢長介が調査します。この調査では，上層に押型紋土器が出て来ていて，その押型紋土器の出土する層の下の層から，爪形紋土器，そして，その下から，また隆起線紋土器，隆線紋土器ですね，これが出土するという関係が捉えられました。

押型紋土器，これは関東で一時期最古の位置を占めていた三戸式とか，田戸下層式とかいう段階と同じものです。それよりも，古い段階のものとして，隆起線紋土器や爪型紋土器が確認されたわけです。

この爪型紋土器と隆線紋土器の関係ですが，第 2 層の上部に爪形紋土器が出て来て，第 2 層の下のほうからは隆起線紋土器も一緒に出てきます。そして，第 3 層からは隆起線紋土器だけが出てくるという関係がとらえられました。そして，また，この第 2 層と第 3 層には，細石器が一緒に出てくるという状況です。第 4 層からは土器がなくて細石器だけが出てくるということが確認できました。細石器は，旧石器時代と新石器時代の間におかれた中石器時代の象徴的な遺物とされるもので，中石器時代というのがあるのかないのかという議論もまた別にありますけれども，それはちょっと置いておいて，ともかく新石器時代よりも少し古い段階のものだと。新石器時代とは土器のある時代ですがそれよりも古い時代の石器です。そういう細石器と一緒に出てくるというところが，ここで出土した土器の古さを考える上で，非常に重要な手がかりだったわけです。つまり，細石器から隆起線紋土器，そして爪型紋土器というように続いていく最古の土器群というのが発見されたのではないかという期待が抱かれたのです。

そのことを裏付けるように，この遺跡での放射性炭素による年代測定がされましてその結果は，福井 3 層，つまり隆起線紋土器だけが出てきている層から採取された炭などから得られた年代が，12,500±350B. P. と 12,700±500B. P. という数値が得られました。

ちなみに，この±350 というのは，誤差の範囲を示しますけれども，これは，また年代測定のところでお話ししますけれども，大体この±の誤差の範囲に収まる可能性が 30%ということを示す数値です。こうやって数字が出ますと，すぐ 12,500B. P. だから，紀元前だと 10,550 年だねというふうに思ってしまうんですが，目安としてはいいんですけれども，正確なところはそうじゃないことも認識してください。つまり，誤差の範囲があって，この誤差の範囲の中に入る可能性が 30%。だから可能性が高いということをいう数字です。ただ，目安として使うには，この数字がよく使われています。

福井 2 層の土器が，これらで，爪形紋土器がこの辺です。

3 層の土器がこの上のほうで，こういう粘土の紐を貼り付けたような，これも縦に貼り付けたんですけれども，紋様が付いている土器があります。この隆線紋土器が古い段階に来るということが想定されたわけです。

完全な形に復元したものがこれです。これは福岡県の遺跡からの爪形紋土器ですけれども，全体を爪のようなもの，爪そのものというより，爪のようなもので非常に細かく押し付けた紋様の土器です。

それから，隆起線紋土器，「起」を取って隆線紋土器とも言いますが，完全な形に復元されたものにこんなものがあります。写真の右上のものは，長野県の石小屋洞穴というところの土器で國學院大学にあります。これは口縁部にちょっとギザギザがあって，そして口縁部の近くのところに非常に細い粘土紐が貼り付けられているものです。それから，右下は神奈川県の花見山遺跡だったかな，これは横方向の粘土紐と，それから胴部のところには，斜め格子の粘土紐の貼り付けがあります。左側は東京の町田市のナスナ原遺跡の隆起線紋土器ですが，ただこうまっすぐな粘土ひもを貼り付けてあるだけじゃなくて，貼り付けた粘土紐をさらにつまんで，波状の粘土紐になっています。古い段階のものは，粘土紐の幅がかなり広いんです。新しくなると，貼り付ける粘土の幅が狭くなってきます。

1961 年秋には，愛媛県の上黒岩岩陰が慶応大学の江坂輝弥によって調査されまして，ここでも最下層から隆起線紋土器が出て来ました。ここでも，隆起線紋土器の出土する層の年代測定が行われまして，12,165±600B. P. という数値でありました。このように隆起線紋土器を出土する土層の年代測定結果というのが，大体一致するということが認識されていくんです。

ただ，この上黒岩岩陰は，隆起線紋土器はさることながら，それよりも，右側の写真の線刻礫が有名です。「腰みの」を付けたような，これなんかそうですけど，横に線があって，そこから下に垂れ下がるように，お相撲さんの「さがり」みたいな感じの線刻があります。胸のところに乳房の表現があって，乳房のところにかかるようにして，これなんか髪の毛の表現だと思いますが，長い髪が垂れ下がった表現のある石が出ていまして，これは，また土偶のところで取り上げるところですけれども，このような線刻礫が出土したことでも有名な遺跡です。

こういう古い段階の土器に，隆起線紋土器とか，爪形紋土器，そして，本ノ木式，室谷下層式などが認められてくるようになってきました。

そうした段階で，山内清男は，改めてこの段階でのまとめということをするわけです。山内清男，佐藤達夫の共著という形で『縄紋土器の古さ』という論文が発表されます（科学読売 12-13，1962 年）。この論文の中で，隆起線紋土器・爪形紋土器・小瀬が沢式・室谷下層式，この 4 種の土器を，井草式以下の撚糸紋土器よりも古く位置付けました。それらを合わせて，つまり隆起線紋・爪形紋・小瀬が沢・室谷下層と撚糸紋土器を合わせて，早期から分離して草創期という区分にしようということを提唱します。

山内清男が縄紋式土器の細別と大別ということで，縄紋時代全体を，早期・前期・中期・後期・晩期という 5 期に分けようと提案をし，それが広く受け入れられてきていましたし，さらに古い段階が見つかってきたということから，早期の前の段階として草創期という時期を設定しようという提案をします。

これは，山内が縄紋時代を早・前・中・後・晩という 5 期に区分した時に示した方針の「縄紋土器型式の細別と大別」の論文の中にも書かれている言葉ですが，「各大別も亦出来れば同数位の細別型式を含むものとしたい」という原則によって，早期の段階の土器が非常にたくさんになってきたというので，早期も，前期も，中期も，大体 10 型式くらいの型式に収まるようにしていこうという方針を示していましたので，その方針に従って早期の中の古いものを分離したわけです。

そして，この論文で，これらの新発見の土器と一緒に出てきた特殊な石器を取り上げます。さっきふれましたような両面加工の植刃だとか断面三角形の錐とか，こういうような石器を取り上げまして，これらが大陸，特にシベリア方面に類似した遺物があるということを強調していきます。

この論文の冒頭で，山内・佐藤は放射性炭素によって得られた年代，つまり 9000 年以上前だという夏島式土器の年代に不信を表明しまして，考古学本来の遺跡・遺物の比較検討によって，年代を得るべきだとする研究をしていく中で，草創期の始まりに紀元前 3000 年という年代を与えています。

一方，その放射性炭素による年代というものに依拠した年代観を進めていた芹沢長介が，1962 年に「縄文土器の起源」という論文を発表します。『自然』という中央公論社から出されていた雑誌ですけれども，自ら調査しました長崎県の福井岩陰遺跡の調査結果に依拠しまして，日本の縄紋土器というのは，細石器文化を母体として，東アジアの一部である九州の一角に発生したものだ，そして，その年代は，大体今から 1 万年から 9000 年前のことだという考えを発表されたわけです。

つまり，日本の縄紋土器というのは世界最古のものである。突き詰めますと，地球上における土器の発明というのは，日本列島の一角，九州で起こったんだということになってしまわないか，この段階では，その考え方も成り立ったわけです。芹沢さんは，当然のこととして，山内の提唱する「草創期」の区分というのは，認めていません。

また，芹沢さんと一緒に福井岩陰（遺跡）を調査した鎌木義昌（よしまさ）は，縄紋土器という範囲は，多縄紋土器，つまり室谷下層式とか本ノ木式の土器からで，縄紋というものを使ってからが縄紋土器だと，それ以前の爪形紋土器や隆起線紋土器は縄紋土器の範囲のものではないという考えを示しました。従って草創期の設定を認めません。

この考え方は，鎌木が編集した 1965 年に河出書房から出されました『日本の考古学』というシリーズの中の，縄紋時代を扱った『日本の考古学Ⅱ』に付けられた編年表に示されています。

これは，ちょっと細かくて恐縮なんですけれども，これが『日本の考古学Ⅱ』に示されている編年表です。

一番左側に，上から，早期・前期・中期・後期・晩期と書かれていまして，それから，右のほうに向かって，九州西北部から一番右が北海道と，地域ごと，時代ごとにこの時点で判明している土器の型式を当てはめていったものです。

これらの雛形は，すでに山内清男が示した編年表，「縄紋土器型式の細別と大別」という論文に付けられた編年表でそれをより細かく詳しくしていったものといえます。

これでご覧になって分かるとおり，早期という一番上の区分，この幅が広いです。それ以下のところ，前・中・後・晩のところは，大体幅は同じくらいです。これは山内清男が示した原則のとおり。ですか

ら，山内の原則に従って早期のところに線を引いてしまいましたけれど，これは私が引いちゃったんですけれども，この三戸式より後を早期，それ以前のもの，より古いものを草創期としようという提案を山内はしているわけです。

1965 年の『日本の考古学Ⅱ』の段階では，このように「草創期」は，取り入れられていなかったんですけれども，現在では，縄紋時代の時期区分には「草創期」は普通に取り入れられています。

つまり，縄紋時代というのは，草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と 6 期に区分されていますし，この博物館の展示でも，そのように示されています。「草創期」の区分はごく一般的に使われています。

しかし，一般的に使われている「草創期」の意味が，山内の意図したものとは，ちょっと違うようになっているところもあります。繰り返しになりますけれども，山内は，戦前に早期を前期から分けた，また晩期を後期から分けた，それと同じ考え方で早期に型式が多くなってきたので各期を 10 型式未満くらいに留めようということから，早期の設定以後に，新たに発見された土器群を草創期としたわけです。

ところが，これを歪めたといっては言い過ぎかもしれませんが，國學院大学の小林達雄さんは鎌木義昌の考え方に近いところがありまして，撚糸紋土器までを早期にします。つまり撚糸紋土器までを早期に格上げしまして，撚糸紋土器より古いもの，つまり，それ以前の本ノ木とか，室谷下層とか，小瀬が沢とか，そういったものを「草創期」としよう，というふうにしています。

小林さんの書いた論文の中で，「筆者もこの草創期設定を支持するが，早期との境界には異論があり，早期初頭の一部を割愛せずに，昭和 30 年以降発見の土器群のみを草創期にあてる説をとっている。」と言っています。 昭和 30 年以降発見の土器群というのは，先程の日向洞窟調査以後のもの，本ノ木とか，室谷下層とか，小瀬が沢とか，そういったものを「草創期」の時としようと。こちらのほうが，そういった考え方による時期区分のほうが現在多く用いられています。

でも，これは，ちょっとおかしいと思うんですが，何かと言いますと，その「草創期」という設定は支持する，しかし，設定は支持しても，そこに入る内容は別だということですね。つまり，山内清男の設定の基準とは，別の基準を持ち出してきているのですから，これは，草創期の語をそのまま使うのはおかしいんじゃないかと。別の基準を持ち出してきているのですから，山内とは別の用語を使って独自の区分をするというのが普通ではないかなと思います。

この点では，明治大学の杉原荘介が，山内のいう「草創期」とする時代については「原(げん)土器時代」という言い方をする。「原」は原っぱの原です。また，芹沢長介の「晩期旧石器時代」の土器という言い方やあるいは「中石器時代」という言い方，そういう言い方のほうが，はるかに筋の通った議論かなと思います。

大体，今日のお話はこれくらいなんですけれども，その後，どうなったのかを簡単に触れますと，同じく九州の佐世保市の泉福寺洞穴で，隆起線紋土器の古い段階のものとして，これ，何と読まれますか。豆粒紋(とうりゅうもん)土器と読むんです。トウリュウモンという音(おん)だけで聞くと，この漢字は，思い浮かばないでしょう。トウリュウモンは龍が登っていく登龍門ですね。

でも，これは，マメツブモン土器とは呼ばないで，トウリュウモン土器と呼んでいるのですが，粘土の粒を土器の表面に貼り付けるというものです。こういう欠片(かけら)を接合して復元して，こういう形になっているのですが，どうも隆線紋土器の古い段階にこういうのがあるだろうと。泉福寺では隆線紋土器の

下のほうの層から，この豆粒紋土器が出てきています。

さらに，器形，土器の形などははっきりしないのですが，青森県の大平山元（おおだいらやまもと）遺跡などで無紋の土器が出てきていまして，これは大平山元だけではなく，他の地域でも古い段階のものとして，隆線紋土器よりももしかしたら古いんじゃないかと考えられる段階の無紋の土器などが出ています。これはかけらでしかなくて，ちゃんとした形に復元されたものがないので全容がつかめないのですが，年代測定はされまして，大平山元遺跡での無紋土器にくっ付いていた炭化物，炭ですね，これを測定したところ，16500年前！という数値も出されています。正直なところ，私は，数字でもってものを言うということをあまりしたくないものですから，こういう数値が出ているよ，ということだけ紹介して，終わりにさせていただきます。

今日はこれで終わりとさせていただきます。

（拍手）

司会：鷹野館長，どうもありがとうございました。それでは定刻となりましたので，これにて，第8回館長講座を終了とさせていただきます。

次回の第9回館長講座は，9月24日土曜日午後1時半から「開発の激化と調査の激増」と題しまして，お話を頂戴します。どうぞお越しください。

本日は，ありがとうございました。